

モディ政権下の高等教育機関への ヒンドゥー・ナショナリズム的介入 －雑誌 *Frontline* の記事から－

馬内里美*

Hindu Nationalistic Interventions in Academic Institutions
under the Modi Government
From the articles in *Frontline*

MAUCHI Satomi

1. はじめに

インドのナレンドラ・モディ (Narendra Modi) 首相が¹⁾、2016年11月に突然高額紙幣廃止を発表して、特に貧困層の間に大きな混乱をもたらした。その混乱もまだ収まらぬ一か月後に、University Grants Commission¹⁾ (以下UGC) が全国の大学副学長に通達を出した。デジタル経済推進のために、大学で金融リテラシーキャンペーンを行うよう、さらに、通達から一か月以内に活動を開始し、進捗状況報告を提出するよう要請した。また、大学の全業務キャッシュレス化に向けた準備に着手すること、加えて、学生がこのキャンペーンの担い手となり家族や周囲にキャッシュレス経済を推奨することも要請している。政府は、同年3月に、財務管理改善と厳格な規律遵守を求める命令を全大学の副学長に送っている。また大学運営委員会の議事項目を、教育を管轄する人的資源開発 (Human Resource Development, 以下HRD) 省とUGCに事前に送るよう命令している。大学の財務管理向上を口実に、

* 東北文化学園大学総合政策学部准教授

1) 本稿では、確認の取れない組織名および役職は英語で表記する。また人名も歴史上人物と現首相ナレンドラ・モディ以外は英語で表記する。

さらに大学運営を政府の支配下に置こうとしている (Rajalakshmi[2017]pp.25-29) . 加えて, 大学は, 単位制度導入等の大学改革, 研究生の給付金縮小など重要課題を, UGC から言い渡されている.

しかし, 政権の高等教育機関への介入は運営面や経営面にとどまらない. 2014年5月のインド人民党 (Bharatiya Janata Party, 以下 BJP) を中心とした連立政権発足以来, モディ政権はヒンドゥー・ナショナリズム的価値観の教育への導入を目指している. その一環として, 高等教育機関に任命権を通して介入する動きが見られる. 政権に批判的な人物を解任, または再任を認めず, 代わりに任務に対する資質を欠いているが, 政権寄りの人物を任命する例が見られる. さらに, 高等教育機関における, このような政権の動きに抗議する人物や団体に対する攻撃や排除も, 直接または間接的な政治的介入を通して行われている.

本稿では, 雑誌 *Frontline* の記事を通して, 学問, 教育, 文化機関に対する現政権および支援団体による介入事例を紹介する. さらに, 反体制的な学生団体を標的にして, 警察や政治家, さらにはメディアを巻き込んで攻撃した事例を紹介する.

Frontline は, 隔週刊の総合雑誌で, 政治的には左派的な姿勢を取っている. 例えば, 2016年12月23日号では, 総ページ数146ページ中, 約100ページをインド高額紙幣廃止の総力特集に当てた²⁾.

2. 神話的な歴史への書き換えに向けた人事

1999年から2004年の BJP 連立政権時に, ヒンドゥー・ナショナリズムを推進する組織集団サング・パリヴァール (Sangh Parivar) と関係のある歴史家が任命され, ヒンドゥー的価値観の視点で歴史書き換えが図られた. ヒンドゥー神話, 叙事詩に重点を置き, 亜大陸に加え東南アジア全域を含む大インドという考え方に傾く歴史観で, 事実の軽視, 単純化した説明などを特徴とする (Mahaprashasta[2014]p.115).

2) 同号では, 定期掲載のコラムを休載し, フィデル・カストロの追悼特集にも30ページを当てている. その点にもその立場がうかがえる.

再度2014年に政権に就いたBJPは教育改革を進めるために、教育・学術機関の長として、政権寄りのヒンドゥー・ナショナリストたちを任命している。HRD省は、National Council of Education Research and TrainingのdirectorであるPravin Sinclairを任期途中で解任した。全国カリキュラム構想、National Curriculum Framework再検討の最中のことであった。国民会議派を中心とした連立政権が2005年に始めたカリキュラム構想再検討を頓挫させる狙いがある、と考えられている(Rajalakshmi[2014],pp.14-15, Mahaprashasta[2015],p.34)。

モディ政権のヒンドゥー教的歴史書き換えの最初の試みのもう一つが、2014年7月、Indian Council of Historical Research (以下ICHR)のchairpersonにYellapragada Sudarshan Raoを任命したことであった。彼は地方大学の観光・歴史学部学部長で、歴史学の分野では業績もなく、学問的に疑問がある。前BJP政権時に、ICHRのメンバーであった。また、サング・パリヴァールの一団体である、国家主義的な視点での歴史書き換えとサンスクリット語使用促進を目的としているAkhil Bharatiya Itihas Sankalan Yojana (全インド歴史編纂協会)と関わりがある。歴史の単純な宗教的解釈、バラモン中心的解釈によるカースト制度擁護が、彼のブログで展開されている。彼はヒンドゥー叙事詩やヒンドゥー教に焦点を当てるべきだと主張する。彼の下で奨励される歴史研究は、二大叙事詩の文献の歴史的証明である。この分野の研究はすでに行われていながらも、年代の特定は困難である。神話の正当性を高めるために歴史研究が行われる可能性が考えられる。2015年5月、Raoは、ICHRの学会誌*The Indian Historical Review*の諮問委員会を解散し、Romila Thaparをはじめとする著名な歴史家が解任された。(Mahaprashasta[2014] pp.115-118, Mahaprashasta [2015]p.34, Rajalakshmi[2014]pp.16-17)。

3. プロパガンダに向けた人事

モディ政権は、ヒンドゥー・ナショナリズム強化に向け、文化機関においても同様に、政権寄りのヒンドゥー・ナショナリストたちを任命している。国立博物館、Indira Gandhi National Centre of ArtsやLalita Kala Akademiで、改革や活性化に成功している館長が更迭されている。組織が自立性を奪

われ、プロバガンダ媒体となると考える政治評論家は多い。また政府が文化機関を独裁主義的に支配することで、ヒンドゥー・ナショナリズムが受容されていく環境を作ろうとしている (Mahaprashasta[2015],34-35)。

Film and Television Institute of India(FTII)で、2015年6月に学生がストライキを始めた。叙事詩『マハーバーラタ』のテレビドラマで主人公の一人を演じた俳優、Gajendra Singh ChauhanがFTIIのpresident兼governing councilのchairmanに任命されたことへの抗議による。FTIIのgoverning councilの8人のうち4人はヒンドゥー・ナショナリズム色の濃い人選である。政権支持やヒンドゥー至上主義組織Rashtriya Swayamsewak Sangh(民族奉仕団、以下RSS)との関連以外には業績のない人選に反対する学生たちに、FTII卒業生を含む映画人たちが連帯を示した。2012年に、関わった催し物が毛沢東主義との関連があるとして、極左過激派扱いされ一人の学生が攻撃された。加害者は、ヒンドゥー・ナショナリズムに基づく学生組織Akhil Bharatiya Vidhyarthi Parishad(以下ABVP)の支持者であった。新体制により表現の自由が脅かされると、学生たちは危惧する。同様の任命は、映画関連では、National Film Development Corporation, Central Board of Film Certification, Children's Film Societyなどにもみられる(Katakam[2015],pp.29-30)。

4. 反ネルーへの改革

初代首相ネルー(Jawaharlal Nehru)は、偏狭なヒンドゥー・ナショナリズムに批判的であった。そのためヒンドゥー・ナショナリストたちはネルーに批判的である³⁾。

文化大臣が、Nehru Memorial Museum and Library(NMML)のある旧ネルー首相宅を近代的に改築する計画、さらに、政治博物館として現在の政権活動を放送するための改造計画を発表した。改築発表声明では、NMMLはネルー個人の博物館で、図書館に偏りがあるかのように述べた。国民会議派は計画に反対し、学者たちも共同声明を発表して反対した。共同声明では、この博物館は、初代首相の生涯だけに限定されるのではなく、インドの独立

3) Noolani,A.G.,[2009]

前後の時代のためのものである、図書館はネルーの著作や Nehruvian と呼ばれる学術書に限定されるものではなく、極めて優れた図書館であると反論した (Trivedi[2015],p37)。

ネルー大学 (Jawaharlal Nehru University, 以下 JNU) はインドの名門大学の一つであるが、幅広い学生活動も盛んである。反体制的であるとしてヒンドゥー・ナショナリストたちにより非難され、ABVP により攻撃されることも少なくない。一例として「マヒシャースラ殉教の日」を挙げる。ヒンドゥー神話の女神ドゥルガーの悪魔マヒシャースラ退治はヒンドゥーの祭りでも盛大に祝われる。だが、主に後進諸階級や部族の間では、自分たちをマヒシャースラの子孫だと考え、その日を服喪の日とする人々がいる。JNU の学生団体は、集会を過去4年間毎回開催してきたが、政権交代後の2014年10月、ABVP の活動家たちによって集会が中断され、参加者たちが暴力を受けた。主流の神話とは異なる神話により後進諸階級が独自の価値観を持つのを、恐れるのだろうか。BJP 政権下で、表現の自由を認めず、議論ではなく暴力で抑え込む風潮が大学で強まるのでは、と危惧されていた (Trivedi[2014] pp.97-100)。

2015年9月に BJP の指導者 Subramanian Swamy が、JNU の教職員や学生を極左過激派と呼び、大学名を Subhas Chandra Bose 大学と変更すべきだと主張した⁴⁾。11月に RSS の広報誌が JNU を反国家的活動の巣窟であると主張すると、ABVP は学内で「反国家的活動」に対する攻撃運動を始め、二つのドキュメンタリー映画上映を中断させた。一つは、カーストに基づく差別的食習慣の、もう一方は、ある暴動でのサング・パリヴァールの役割を描いた映画であった。また学生寮で火を焚くヒンドゥー教儀式を止めさせられ、宗教的感情を傷つけられたとして、一人の教員が告訴された。禁止を決定した3人の舎監のうち、キリスト教徒であるとの理由から、彼一人が標的になったと考える学生は多いという (Mahaprashasta,[2016a],p.43)。

このような状況下で、JNU 副学長に、インド工科大学デリー校 (Indian Institute of Technology Delhi, 以下 IIT デリー) の教授、M. Jagadesh

4) S.C. ボースはインド独立運動時に枢軸国と協力することを呼び掛け、日本軍と協力して自由インド仮政府を樹立した民族運動の指導者。

Kumar が任命された。JNU の副学長に、よりふさわしい然るべき人選が行われるべきであったと指摘する教育学者もいる。新副学長は右翼政治団体とのかかわりが噂されている。どの団体にも正式に関係していないと述べているが、IIT デリーでは、RSS 寄りの伝統科学を推進する Vijnana Bharati の催し物への参加は認めている。IIT デリーは、RSS の末端活動であるシャーカ（shakhas）が大学構内で行われるなど、右翼活動の影響は小さくはない（Trivedi[2016] pp.44-45）。

5. インド工科大学マドラス校における学生団体認定取消

インド工科大学マドラス校（Indian Institute of Technology Madras, 以下 IIT マドラス）は、2015年5月に学生団体 Ambedkar-Periyar Study Circle（以下 APSC）の認定取消により議論的となった。

APSC は前年のアンベードカルの誕生日に結成された社会問題を取り上げる研究会である。結成一周年記念として4月14日に他大学から教授を呼び、「アンベードカル博士の今日的意義」という講演を開催した（Rajasekaran, [2015] p.18-19）。

HRD 省の高等教育部は、5月21日 IIT マドラスに公式声明を出した。APSC が学内でポスター・パンフレットを配布して学生たちの間に憎悪の空気を生み出しているとして、それに対する大学側のコメントを求めるものであった。また、4月29日付の「IIT マドラスの学生たち」からの苦情の手紙コピーも転送した。匿名学生たちの手紙には、APSC は指定部族と指定カーストを分断しようとしている、首相やヒन्दゥー教徒たちに対して憎悪を生み出そうとしている、HRD 省を批判している、と書かれていた。

2015年5月22日、学生部長は、「現体制とその政策に対する憎悪を拡げる」パンフレット発行や会合企画が、学生の特権の濫用に当たるとして、APSC 「認定取消」を発表した。学生部長は、団体が「議論を起こすような活動」に従事し、規定に違反している、と学生に伝えた。また、「カーストの線引きで学生たちを分裂させる」ので、カースト制度に反対する政治家であり社会活動家であった二人の名前を団体名から外すべきだと主張した（Ibid.8-19）。

APSC の学生たちにとって、IIT マドラスの経営陣は保守的に映る。留保制

度の実施に対して消極的である。高等教育機関には、批判的思考が奨励されるべき場でありながら、政権やヒンドゥー教的価値観の強要に対する異議を、大学側は抑え込もうとしている。さまざまな分野で活躍する人を招く講演には、APSCの希望は反映されず、宗教右派や企業のシンクタンクの立場を伝える場であるとAPSCの学生は感じている。そのため彼らは募金活動で外部講師を招き、社会問題を取り上げる研究会を立ち上げ活動してきた(Ibid.,p.20-21)。

大学側は、処分はしかるべき手順に則った決定だと、強硬な姿勢を取った。また一部の学生と大半の教員も大学側についた。しかし、ソーシャルメディアを通して反響が大きくなり、BJPと地元の与党政権以外の政党もこの問題に大きく反応した。大学側は、処分は暫定的であり、特定の問題についてAPSCから説明を求めているだけである、と態度を変えていった(Ibid.,p.21-22)。

匿名の苦情に対していかなる対処も行うべきではない、という回状がCentral Vigilance Commissionから約半年前に出されているにもかかわらず、なぜHRD省は匿名の手紙を受けてIITマドラスに公式声明を出したのか。また、HRD省は団体や個人に対する処分を勧めていなかったにもかかわらず、大学はなぜ内部調査すら行わず一方的に団体認定取消を行ったのか(Ibid.,p.19,22)。

APSCの学生たちが大学主催講演会講師として提案したが大学側から反対に遭い、直接APSCが革命家Bhagat Singhの講演依頼したJNU教授のChaman Lalは、これが大学や左派学生団体に対する取締りの最初の一步なのでは、とツイッターで懸念を示した(Ibid.,p.21-22)。

6. ダリト研究生の自殺

2016年1月17日、ハイデラバード大学(University of Hyderabad)の博士課程の学生で、左派ダリトグループのAmbedkar Students' Association(以下ASA)のメンバーでもあったRohith Vemulaが自殺した。これは大学に根付くカースト差別によるものとして大きく注目された。学内の学生同士の小競り合いが政治家の介入を招き、いわゆる不可触民として知られているダ

リトの学生活動家たちに対して過度に厳しい処分がなされた結果のことであった。

発端は約半年前に遡る。ASA は2015年7月30日に1993年のボンベイ連続爆破事件で死刑執行された Yukub Menon の追悼集会を大学構内で開催した。これに対し、ABVP の学生、Nandanam Susheel Kumar がフェイスブックで、「ならず者たち」と中傷した。8月3日深夜過ぎに、ASA の学生たちは Susheel を呼び出し、謝罪を要求した。その際小競り合いになり、彼は警察に通報、また知り合いの警視にも連絡した。二組の警官が来たが、この時点で彼のシャツが破け、肩に打ち身ができていた。ASA の要求を受けて、謝罪をアップロードして、その場は収まった (Shankar, [2016a], p.5-9)。

翌日4日、約10人の ASA の学生活動家が警察で事情聴取を受けた。Susheel は病院に入院し、警察を呼び、ASA の学生に対して暴力と恫喝の申し立てをした。数日後に盲腸炎で手術を受け、ASA の学生に殴られたのが原因だと主張した。8月12日、Proctorial Board の事故調査委員会が、告訴人の証拠不十分のまま報告書を提出した。大学教員団体である University of Hyderabad Teachers Association は報告書の内容と手続きに問題があると抗議した。また構内に安易に警察を入れることにも疑問を呈している。8月31日、Proctorial Board は、事件に関与したとして Susheel が名前を挙げた5人の学生に対して学期終了までの停学を提案した。だが、大規模な抗議を受けて3日後に撤回した。規定を無視して設置された新たな委員会が、12月半ばに報告書を発表した。事件後に副学長に任命された Appa Rao Podile は処分として、在学期間中の寮、食堂、大学施設の出入りや学生選挙参加の禁止を発表した。処分を受けた学生たちは冬の寒いなか構内で野宿した。およそ1か月後に Rohith は自殺した⁵⁾ (Ibid., 7-12)。

与党政治家とのつながりも指摘されている Appa Rao Podile は、学生の自殺後休職している⁶⁾。調査委員会の委員長で、その後副学長代理となった

5) National Commission for Scheduled Castes の P.L.Punia によると、Rohith の給付金は事件直後から中断されていたという (*Frontline*. vol.33 No.3 pp.10-11)。

6) Rohith の自殺後、長期休暇を取っていた副学長が3月21日突然復職し、会議を招集した。それを聞きつけた学生集団が抗議のため、副学長宅に押し入ろうとして、投石し、ガラス窓を割った。膠着状態の後、多くの警官たちが鎮圧に入った。さらに平和的に抗議する多くの学生に対し、夕方に警察が暴力的に鎮圧し一斉検挙した (Shankar, [2016b])。

Vipin Srivastava も休職した。二人とも、ダリト学生に対する嫌がらせと考えられる過去を指摘され非難された。Appa Rao の場合は学生と乱闘になり10人の学生が停学処分を受けた。また、Vipin Srivastava の学部長時代に、ダリト学生が適切な指導を受けられずに自殺している (Ibid.,9-11)。

立場の異なる学生の小競り合い程度の問題が、結果として研究生を自殺に追い込む過重な処分に至った。それはなぜ起こり得たのか。

ABVP の学生が警察と政治家に訴え、警察と政治が大学に介入したからである。1月21日にテレビのインタビューで Susheel は、集会の写真フェイスブックで見て、即座に学内での反国家的活動を知らせるために知り合いの警察の副検査官に写真を送った、と語った。彼は、小競り合いになったときも警察に通報し、別の副検査官にも連絡を取った。また彼の兄も母も BJP の活動家である。事件の翌日、母親が BJP の議員を伴い、大学の副学長代理と面会した。Susheel が調査委員会で証言した8月26日に、彼の母はハイデラバード高等裁判所に、大学側の対応を不服として告訴した。さらに、地元選出議員で労働雇用大臣である Bandaru Dattareya が、8月17日、HRD 大臣に手紙を書き、大学内の「カースト差別主義的、過激で、反国家的」政治的風潮を懸念し、ASA の学生たちと大学執行部を批判した。手紙は、HRD から大学の Registrar に転送され、その後5回催促状が送られた。4回目は、新副学長に送られた。HRD 大臣は、この介入を「VIP」からの通報に対する「通常」の対応であると擁護している (Ibid.,6-9)。

大学の処分は公正になされたとは言い難い。ABVP の学生の申し立ては、証拠不十分であるし、彼の過剰な反応と主張は客観的に判断される必要がある。警察や地元政治家の介入も、まして中央政府からの干渉も不必要な小競り合いである。大学側が双方への注意にとどめる程度が適切であったであろう。しかし、副学長の人事も含めた政権からの介入により、大学は、片方だけの主張を受け入れ、政権に批判的なダリト学生を排除するような厳しい処分を行った。

7. JNU の扇動罪事件

ハイデラバード大学での Rohith Vemula の自殺から約3週間後、JNU の学生活動に BJP の政治家が介入し、警察が6人の学生に対して扇動罪を課し、うち3人が逮捕された。

2016年2月9日夜、極左的考え方をもち学生団体に所属していた学生10人が新しい団体立ち上げのオープニング企画として文化イベントを開催した。中央政府の弾圧を受けているカシミール地方の人々に連帯し、国会議事堂襲撃で2013年の同日に死刑執行された Afzal Guru を追悼するものであった。学生主催行事の盛んな JNU で、通常通り、大学に開催申請を提出し、ポスターを張りパンフレットを配布した。しかし、会の直前に大学側が許可を取り消した。学生はこれに抗議してプログラムを開始したところ、ABVP の学生グループが会場周辺にニュースチャンネル Zee News⁷⁾ の取材陣とともに集まり、「反国家的」と叫び始めた。対抗して会の参加者たちも、スローガンを叫び始めた。左派の学生たちは、ヒンドゥー・ナショナリストの政治目標、封建制、カースト差別、家父長制への反対を訴えた。そこに顔を隠した複数の部外者が加わり、カシミール分離派が叫ぶような過激なスローガンを上げ始めた。会の主催者側は部外者たちを制止した。中断に抗議する学生たちは大学の門までデモ行進をしたが、その間 ABVP の学生たちと小競り合いがあった (Mahaprashasta, Trivedi[2016],p.4-8)。

この一連の出来事は大きな騒動になった。それは Zee News によって録画され放送されたが、さまざまなテレビ局のニュースでかなりセンセーショナルに取り上げられ、JNU は反国家的活動家の巣窟であると批判された。東デリー選出の BJP 国会議員、Mahesh Giri が近くの警察署に「反国家的活動」を告訴し、第一調書が作成された。これは ABVP の援助を受けて行われた。内務省から迅速な対応を求められたと主張するデリー警察が作成提出した詳細な報告書によると、イベント開催日の朝にポスターを見た公安部の警官が、左派組織が陰謀をたくらむ恐れを警戒したという。10日から11日にはメディ

7) モディ首相は、事件の約3週間前の1月20日に首相官邸で Zee Network の創業者 Subhash Chandra の自叙伝の序幕を行った (Trivedi,2017)。www.dnmedia.com/india/report-dr-subhash-chabdra-s-book-the-z-factor-to-be-launched-at-jif-2020-2168151(2017/1/30 アクセス)

アで騒がれ、憎悪の風潮が生じ、学内での暴徒による暴力を恐れ左派やアンベードカル派の学生は身を隠したほどである。12日には、デリー警察が、新任副学長の V.Jagadeesh Kumar とともに大学構内に入り、JNU 学生自治会会長 Kanhaiya Kumar をはじめとした6人の学生に扇動罪で逮捕状が出された。主催者側の学生たちが過激なスローガンを叫んでいる改竄映像がさまざまな媒体で放送された。JNU は内部調査委員会で、8人の学生が反憲法的スローガンを挙げたと結論付けた。JNU 教員組合は、非民主的に委員選出した調査委員会自体が反憲法的であると、反対した (Ibid.,8-9)。

ヒンドゥー・ナショナリストたちは、攻撃的な中傷活動を展開した。内務相 Rajnath Singh は、逮捕状の出た学生のうち唯一のムスリム学生 Umar Khalid がテロ集団と関係があるのではないかと、根拠なく言った。二極化した議論のなか、ヒンドゥー・ナショナリストの活動家たちは過激化し、デリーの地方裁判所でジャーナリスト、JNU 学生や教職員たちを攻撃した。17日には地方裁判所で、Kanhaiya が攻撃を加えられた。同日、弁護士集団が最高裁判所の裁判官たちを攻撃した。録画を気にせず暴力行為を続け、警官の制止も気にしないという目撃証言もある。暴動を率いた2人の弁護士はすぐに保釈された。デリー議会の BJP 議員が抗議する活動家を殴っているのが放送された。一方、各地の他大学の抗議学生たちも ABVP の活動家たちによって暴力を受けた。逮捕された学生の家族は殺人やレイプの脅迫を受けた (Ibid.,9,12)。

逮捕から3週間後の3月2日にデリー高等裁判所は Kanhaiya Kumar を執行猶予付きで保釈した。彼は釈放後の演説で、中央政府に抵抗しているカシミール人が用いる言葉を敢えて使い「私たちはインドからの自由 (azadi) でなく、インド内での自由を求める」と述べた⁸⁾。一方、保釈命令は、国家主義的であった。「請願者は、ネルー大学学生自治会の会長として大学構内で開催されるいかなる反国家的催し物に責任をもち、説明責任を果たすよう期待されている。・・・関係者全員、我々の国境は我々の軍および準軍事的組織によって警護されているゆえにこの(表現の)自由を享受していることを留意

8) インタビューで、Kanhaiya Kumar は、JNU への攻撃は憲法への攻撃である、と述べている (Mahaprashasta,2016a)。

しなければならない。・・・国家の統一を脅かす影響力を持つのは反国家的スローガンを掲げることなのである。」さらに、スローガンに反映されている思想は言論と表現の自由の基本的権利として保護されえない、と述べた。また、学生政治のこのような傾向を「感染」であると考え、「伝染病」にならないように制御しなければならない、壊疽を起こすほどになれば切断が唯一の治療である、とのたとえを用いた。それに対して多くの弁護士や裁判官は、保釈命令には、スローガンの「反国家」性のいかなる証拠もないと考えている (Mahaprashasta,2016a)。

3月18日には、Umar Khalid と Anirban Bhattacharya が釈放された。デリー警察は当初、映像を根拠として6人の学生に扇動罪を課したが、映像の真偽解明と最終報告書に時間がかかる、との判事の発表は、証拠不十分を示している。また、非民主的であると批判された大学の調査委員会は、学生たちには手続き上の問題があり、それが故意で大学側をミスリードする狙いがあったと結論付けた。学生たちはその結論に強く反対した。また、主催学生が外部集団に会を乗っ取らせたのは残念である、と報告書は述べているが、これにより、問題のスローガンは主催学生たちではなく外部集団であると実質的に認めている。これは ABVP の主張と異なる (Mahaprashasta,2016b)。

8. ヒンドゥー・ナショナリスト団体・警察・メディアとの連携

ハイデラバード大学での事件同様に ABVP が騒動を引き起こしているが、その組織的中傷は突然生じたものではなく、前述したように持続的に行われてきた。

一連の出来事により、JNU 弾圧が計画的に行われたこと、そこにおいて ABVP が果たす役割は明白である。JNU 学生自治会の joint secretary である ABVP の Saurabh Kumar Sharma が、催し物を撮影するために Zee News の取材陣を招いていたことが明らかになった。議論の的となった映像の5種類を検査したところ、改竄されたものが2種類あることが後に明らかになった。改竄映像では、「パキスタン万歳」と叫ぶ Kanhaiya たちが映されていた (Mahaprashasta,2016a)。また彼によると、当日の昼に会を知り、ポスターを撮影し、その写真を大学の複数の部署に配り、「反国家的」な催し物が

行われると訴えた。彼は即座に警察とメディアにも連絡した。彼の言葉を裏付けるように、会が始まる前に幹部を含む警察が大学構内の複数の場所に行ったことを、JNUの調査委員会は認めている。報告書によると、学生の行進に合わせて、大学の警備が警察を呼び入れ、行進に同行していた(Mahaprashasta,2016b)。

前述したように、デリー警察は、公安部がポスターを見て警戒した、と報告書で書いている。ABVPの連携にせよ、独自に大学の学生活動を注視するにせよ、警察は学生のイベントを監視している。大学の警備も連携している。そのうえで、警察は、改竄の疑われる映像に基づいた政治家の告訴に応じ、学生を扇動罪で逮捕する。それに対し大学側も協調し、政権寄りとされる着任間もない副学長が、警察の大学入構に同行する。さらに、大学側は学生に非があると結論付ける報告書を出したのである。

Ramakrishnanと二週にわたり関連記事を続報したMahaprashastaは、JNUでの激しい議論はサング・パリヴァールを助けているようであると指摘している。彼らの間では、この事件へのBJPの対応により、「ナショナリズム対扇動」の下でヒンドゥー・ナショナリストのイデオロギーの復活に成功したと考えられている⁹⁾。前年のビハール州やデリーにおける議会選挙のBJPの後退を視野に入れると、この問題を利用して有権者の目をそらし、さらに、経済問題、政治問題から人々の注意を逸らす効果があると考えられる(Ramakrishnan, Mahaprashasta[2016])。

JNUでの激しい議論を巻き起こした出来事におけるサング・パリヴァールの諸団体の操作を疑う学生団体や政党もある。デリーの選挙で勝利したAam Aadami Party(AAP)は、早くから映像改竄を疑い、ABVPの学生たちが反国家的スローガンを叫んでいる映像を取り上げ、ABVPが問題を起こしながら、Kanhaiyaたちを責めていると述べた。サング・パリヴァール諸団

9) HRD省は、愛国心を教え込むために大学構内で国旗を目立つように誇りをもって掲揚すべきであると、大学副学長との集会で命令を出した(Mahaprashasta, Trivedi,2016)。教育同様にヒンドゥー・ナショナリズムのプロパガンダの手段として重視されているのがメディアである。2016年11月、高額紙幣廃止による混乱の最中に、最高裁判所が訴訟を受けて出した命令により、映画館で、上映前に国歌をインド国旗の映像とともに放送することが義務付けられた。https://www.theguardian.com/world/2016/nov/30/indian-court-orders-cinemas-to-play-national-anthem-before-films(2016/12/17アクセス)

体は、ヒンドゥー・ナショナリズムの政治目標推進のために、ごまかしを行う前例がある。アヨーディアのラーマ神寺院をめぐる警察との衝突で活動家が何百人も「殉教者」となったと主張していたが、名簿には、アヨーディアに行ったことのない人の名前も含まれていた。インド共産党(マルクス主義)政治局員は、サング・パリヴァールの手法は、共産党排除のために国会議事堂放火を計画命令し、共産党を非難したナチスの下で採用された手法と類似していると指摘する¹⁰⁾。BJP指導者たちによる国家主義的レトリックは集団暴力を助長し、各地で、政府に反対する人々の家や車への投石や、脅迫が相次いだ(Ibid.,18-21)。

それでも、BJPによる世論分断の手法は、モディ政権の失敗から目を逸らし、逆に次の四点でサング・パリヴァールを助けているようであると指摘されている。第一に、抗議する社会集団はすべて反国家的であると烙印を押そうとするBJPの努力は一般人の間で何らかの影響力があり、党の愛国的イメージに貢献し、政権批判の抑止力となっている。第二に、ダリトの政治団体が反ヒンドゥー・ナショナリストのイデオロギー運動を強力に進めているが、支配カーストの学生逮捕でダリトに敵対していないというメッセージを示した。第三に、カシミールの利益をめぐり、連立しているカシミールの政党、Peoples Democratic Partyに圧力をかけることができる。第四に、伝統的なサング・パリワールの有権者たちをなだめることができる。RSSはJNUを長く共産主義の温床として批判してきた。例えば、敵国の諜報部から資金を得る団体を通して多様な反国家的活動を行っていると、JNUを裏付けなく批判してきた。今回のJNU問題は、統一ヒンドゥー国家形成の夢をよみがえらせたこと、指摘されている(Ibid.,21-22)。

10) インド独立前のヒンドゥー・ナショナリストたちの、イタリアのファシズムやドイツの人種政策への関心と関係について以下参照。Noorani A.G., "Soldeirs of the Swastika" *Frontline* vol.32. No.1 pp.4-12. Casolari, Marzia, "Hindutva's Foreign Tie-up in the 1930s : Archival Evidence", *Economic and Political Weekly* January 22, 2000, pp.218-228. ヒンドゥー・ナショナリストの代表的人物、サーヴァルカル(Vinayak Damodar Savarkar)と、S.C. ボースや、いわゆる中村屋のボースこと、ビハーリ・ボース(Rash Behari Bose)の関与も言及されている。

9. 結び

以上、三大学での事例を紹介した。ABVP (IIT マドラスの場合は不明)が、反ヒンドゥー教教的だと狙いを定めた学生団体の催し物を妨害することは、FTIIやJNUの例のように政権交代前にも行われていた。ヒンドゥー・ナショナリズムの価値観に異議を唱える学生団体を容赦なく攻撃する。IIT マドラスとハイデラバード大学では、アンベードカルの名前を冠した学生団体が攻撃された。ダリトはBJPにとって票田である。BJPが施すと約束するダリト寄りの政策に期待し従順である限りにおいて、ダリトたちに温情主義的な態度を見せ、アンベードカルを称賛する姿勢を見せる。しかし、自分たちの価値観を彼らが公然と批判すると、看過できず懲罰を加えようとする。またハイデラバード大学やJNUの攻撃対象となった催し物は、偶然の一致なのか、どちらも大きな論議を呼んだ死刑執行に抗議して行われた受刑者追悼集会である。

しかし、ハイデラバード大学やJNUの事例に見られるように、政権交代後はより大胆に、かつ用意周到に攻撃が行われる。政治家、警察、そしてメディアとの協力体制がうかがえ、大掛かりなものになっている。また大学副学長の人選が政権にとって望ましい処分を容易にしている。大学の独立性は侵されているのである。

第一次BJP政権時に、作家アルンダティ・ロイは次のように書いた。

インド政府の両腕、それがカニのはさみのように見事に進化した、協力ぶり。片方の腕が、インドを塊で売却する一方、もう片方がヒンドゥー・ナショナリズムと宗教的ファシズムの雄叫びと合唱で、現実から注意を逸らしていく。核実験の実施、歴史教科書の改竄、教会の焼き討ち、モスクの破壊、検閲、監視、市民的自由と人権の停止、とくに宗教上の少数派を差別するための、だれがインド市民でだれがそうでないかの弁別。こうしたことが公然と行われている(ロイ、137頁)。

書かれて十年以上になるが、この記述は今一層真実味を帯びている。

オックスフォード英語辞書は、2016年の世界を代表する言葉として、「ポスト真実」(post-truth)を選んだ。客観的な事実が軽視され、感情と信条に訴える都合の良い言葉が気分を支配し、世論を形成するような風潮を意味する。

英国のEU離脱と米国大統領選のトランプ旋風の文脈で使用された言葉であるが、ヒンドゥー・ナショナリズムの特徴でもあると言える。そして、その風潮は日本でも、東日本大震災以降、強まりつつある。安倍政権とモディ政権は親和性が強い。日本で現在、政権の背後に「神道ナショナリズム」と呼べるような、戦前の価値観を理想としている国家主義が存在している。そして、ヒンドゥー・ナショナリズム初期にファシズムとナチズムを通して日本の右翼や軍国主義と関係を有していることを考えると、その親和性は、現在の問題にとどまらない。歴史的関係も含めて考えると、日本にとってもヒンドゥー・ナショナリズムは他人事として済ませることはできないのではないか。また排外主義が欧米で伸長していることも考えると世界規模の問題として考えられるかもしれないのである。

参考文献

- 辛島昇ほか監修 [2012], 『[新版]南アジアを知る事典』平凡社
- 中島岳志 [2005], 『ナショナリズムと宗教 現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』春風社.
- 広瀬崇子, 近藤正規, 井上恭子, 南埜猛編著 [2007], 『現代インドを知るための60章』明石書店.
- ロイ, アルンダティ, 本橋哲也訳 [2003], 「〈帝国〉に抗して」『帝国を壊すために - 戦争と正義をめぐるエッセイ』岩波書店.
- Katakam, Anupama [2015] "Saffron script", *Frontline*, vol.32 No.13 pp.29-32.
- Mahaprashasta, Ajoy Ashilwad [2014] "Peddler of myths", *Frontline*. vol.31 No.16 pp.115-118.
- Mahaprashasta [2015] "Corrosive agenda at work", *Frontline*. vol.32 No.11 pp.32-35.
- Mahaprashasta. [2016a] "Leading the debate", *Frontline*. vol.33 No.6 pp. 41-47.
- Mahaprashasta [2016b] "Rising spirits", *Frontline*. vol.33 No.7 pp. 43-44.
- Mahaprashasta, Ajoy Ashilwad, Trivedi, Divya [2016] "In defence of JNU", *Frontline*. vol.33 No.5 pp.4-12.
- Noolani, A.G. [2009] "Power drive", *Frontline*. vol.26 No.8, pp.81-86.
- Rajalakshmi, T.K. [2014] "Twisted texts", *Frontline*. vol.31 No.25 pp.14-17
- Rajalakshmi [2016] "Eroding autonomy", *Frontline*. vol.33 No.5 pp.26-28.
- Rajalakshmi [2017] "Campus control", *Frontline*. vol.34 No.1 pp.25-31.
- Rajasekaran, Ilangovan [2015] "Derecognising dissent" In *Frontline*. vol.32 No.12 pp.18-23.
- Ramakrishnan, Venkatesh & Mahaprashasta, Ajoy Ashilwad [2016] "An old dream and a new horse to flog", *Frontline*. vol.33 No.5 pp.17-22.
- Shankar, Kunal [2016a] "The death of a Dalit scholar", *Frontline*. vol.33 No.3 pp.4-12.

- Shankar[2016b] "Caught in a trap", *Frontline*. vol.33 No.8 pp.41-44.
- Trivedi,Divya[2014] "Orgy of myth making", *Frontline*. vol.31No.23 pp.97-100.
- Trivedi [2015]"Crushing dissent", *Frontline*. vol.32No.19 pp.35-37.
- Trivedi [2016]"Personal matters", *Frontline*. vol.33 No.3 pp.44-45.
- Trivedi [2017]"Peddling myths", *Frontline*. vol.34 No.1 pp.23-24.

